

ナマステ

特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



139 号

2020 年 3 月 10 日発行号

2020 年 今年もよろしくお願いします

ログビルダーの若狭さんを中心に積み重ねてきたプライベートキャンプ場の整備ももうすぐ終わる。2008 年ごろから木下善晴さんのキャンプ場で、善晴さんに頼んでログハウスを造らせていただいたことから始まる。ログハウス宿泊棟、ログハウス多目的棟。そして今、水洗トイレ棟が後少しで完成する。「理想のキャンプ場を目指して」の企画であった。この間、建築にかかわっていろいろな人に出会った。それが一番の財産であるかもしれない。

2020 年がはじまった。終わっていくものもあるし、見直さなければならないものもある、続けていくものもあるし、新たに始まるものもあるだろう。INCHらしく、みんなで話し合っ合議の元歩んでいきたい。今年もよろしくお願いします。

自然文化誌研究会 代表理事 中込卓男

活動報告

「冒険学校 まふゆのキャンプ」報告

12.26~28

参加者 8 名で開催しました。前日に降った雪が残り、初日は雪で遊ぶこともできました！！



雪遊び、薪集め、薪割り、焚火、野鳥観察、星空観察、燻製、餅つき、村内散策、ログハウスでテント泊・・・いろいろできました！！

参加者のみなさまにはキャンプの写真と動画を CD-R で同封しました！！

この事業は令和元年（平成 31 年）度 国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて開催しました。

第16回通常総会については紙面の都合上、2020年活動予定・2019年決算報告のみ、報告いたします。活動予定については最終ページをご参照ください。

●2019年度決算報告（2019年1月1日～12月31日）

令和1年（平成31年）度 特定非営利活動にかかる事業会計収支計算書

平成31年1月1日から平成31年（令和1年）12月31日まで

特定非営利活動法人自然文化誌研究会

科 目	金 額（単位：円）		
I 収入の部			
1 会費収入			
会費収入		596,000	
2 事業収入			
(1) 野外環境学習事業収入	1,558,500	1,558,500	
(2) 指導者養成事業収入	0		
(3) 博物館事業収入	0		
3 委託事業収入		109,688	
4 補助金等収入			
助成金収入		473,000	
5 寄付金収入			
寄付金収入		447,066	
6 雑収入		11,500	
当期収入合計(A)		3,195,754	
前期繰越収支差額		-295,922	
収入合計(B)			2,899,832
II 支出の部			
1 事業費			
(1) 野外環境学習事業費	686,673	732,506	
(2) 指導者養成事業費	24,955		
(3) 博物館事業支出	20,878		
2 一般管理費			
(1) 職員給与	1,105,000		
(2) 通信費	56,130		
(3) 事務局運営費	32,281		
燃料代	157,524		
電話代	219,320		
事務用品費	37,614		
書籍資料代	0		
印刷・製本費	233,227		
備品代	134,834		
3 予備費	211,854	1,975,930	
4 補助金支出	473,000	211,854	
当期支出合計(C)		473,000	
当期収支差額(A-C)			3,393,290
前期繰越収支差額(B-C)			-197,536
当期繰越収支差額(B-C)			-493,458

成金基金：¥215,000

令和1年（平成31年）度の決算報告について出納簿等提出された書類に基づき監査した結果その内容は正確であることを認めます。

令和 2 年 2 月 9 日

監査員
同

瀬谷 勝頼
永 永法

●会員（2019年12月31日現在）

正会員：26人 一般会員：34人 家族会員：10家族

学生会員：26人 賛助会員：4人 友の会会員3人 合計103人（年会費納入者）

■ 活動案内 ■

その1 「野草の天ぷらとお茶つみの会」 4.19(デイキャンプ)

毎年恒例の「野草の天ぷらとお茶つみ」のデイキャンプをやります。普段は「葉っぱ」「雑草」として見落しがちな野草でも食べられるものがたくさんあります。野草を摘んで、天ぷらにして食べましょう。

講師は樹木医の岩谷美苗さんです。恒例の「キノコ探し」もメニューに予定しています。フランス料理の高級食材「モリーユ」が見つかるかも？

また、自分たちでお茶をつみ、蒸して、揉んで、飲みましょう。講師は宮本茶園の宮本透さんです。雨天決行です。友人・知人を誘ってぜひご参加下さい。



日 時：4月19日(日) 9:30~14:30
場 所：東京学芸大学 環境教育研究センター(農場)
対 象：どなたでもご参加ください♪

参加費：中学生以下：300円 高校生以上：500円

*当日参加OKです。事前申し込みは不要です。

*雨天決行です。

*昼食、帽子、飲み物は持参をお願いします(天ぷらをするのでおにぎりなど。)

*余裕のある方は9時ぐらいに来て準備を手伝ってくださると嬉しいです(^ ^)

*コロナウィルスによる影響が長引いた場合は、中止になる可能性もあります。お越しになる前に本会のホームページをご確認ください!!

←たくさん採れた野草!この後、天ぷらです。

←お茶も朝からみんなで揉みます~。

その2 冒険学校「むらまつりキャンプ」 5.2~5.5(3泊4日)

新緑がまぶしい、多摩川源流の小菅村でキャンプを行います。清流での川遊び、焚き火、山菜採り、テント泊、ご飯づくり、五右衛門風呂、お祭りの見学などなど、多くのプログラムを準備しております。

小菅村の「第33回多摩源流まつり」も開催されます!夜は、日本一のお松焼きと、山に響きわたる花火大会も見に行きます!ご家族での参加も可能な、ゆったりとしたキャンプですよ!!



日 程：5月2~5日(3泊4日)

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

対 象：子どもだけの場合は小学校3年生以上、
親子参加の方は幼児もOKです。

宿 泊：テント泊、ログハウスでの寝袋です。

参加費：食費・宿泊費・保険代・教材費・

奥多摩駅~小菅村間の交通費を含みます。

会員：子ども ￥30,000 非会員 32,000円

会員：親子一組 ￥40,000 非会員 46,000円

※先着順で25人の定員です、お早めどうぞ!!

※これ以外の組み合わせの時は、ご相談いたします。

※短い日程を希望の方は事務局へご相談ください。

※会員になると、今回から会員料金で参加できます。

※参加希望者は、ハガキ・もしくはE-mailに
住所・氏名(ふりがな)・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、4月19日(日)までに事務局までをお申し込みください。

この事業は令和元年(平成31年)度 国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて開催します。

その3 冒険学校「こすげ冒険学校」

8.2~8.8(6泊7日)

小菅村の自然と文化を満喫しながら過ごす 6 泊 7 日の長期キャンプです。川遊びでは飛び込んだり、思う存分に遊び続けよう！寒くないように焚き火をしながら、お風呂も沸かしておこう。星空を眺めたり、暗闇の中を歩いてみよう。一緒に山の中や村の暮らしを探検する 7 日間です！

日 程：8 月 2 日（日）～8 日（土）6 泊 7 日

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テント・ログハウス・野宿などで寝袋

対 象：小学校 3 年生～中学校 3 年生

参加費：45,000 円

定 員：25 名※定員を超えた場合は抽選となります。
備 考：全日程の参加を原則とし、途中からの参加等は不可とします。

申し込み方法：ハガキ・もしくは E-mail に住所・氏名（ふりがな）・年齢（学年）・性別・電話番号を記入の上、**5 月 15 日（金）必着（締め切り厳守になります）**に事務局までをお申し込みください。

※抽選になった場合について：

①参加の可否については 5/22 日（金）までに郵便で通知します。

②兄弟・姉妹間での参加の交代等は無しとします。



その4 「タイ環境学習キャンプ」

8.15~8.24(9泊10日)

今回も首都バンコクから車で数時間、ウタイタニー県バンライ郊外の環境学習施設「パンダキャンプ」を拠点に活動を展開します。毎年訪れているファイカケン野生生物保護区は世界遺産であり、観光客はもとより、地元の方でも許可がなければ入れません。野生の牛、鹿、孔雀、サイチョウなどの貴重な野生動物を観察します。また、カレン族やラオ族などの少数民族の部落を訪問し、彼らの文化を学習します。恒例の現地教員や子供達とのワークショップも好評となっています。高層ビルの立ち並ぶバンコクと少数民族が暮らす亜熱帯の森に皆さんは何を感じるでしょうか？通訳、ガイドも同行し、現地のラジャバト大学との連携もありますので安心してご参加ください。

日 程：8/15（土）～24 日（月） 対 象：高校生～一般（中学生以下は要相談）

参加費(予定): 会員 155,000 円 非会員 165,000 円 ※航空券と現地での費用が含まれています。

申込み：5 月 31 日（日）ですが、参加希望の方は事務局までお知らせください。

その5 「INCH(祭り)ライブ 2020」

9.26~27(1泊・日曜日)

秋の一大イベント「INCH 祭り」を開催します！ログハウスのあるキャンプ場で、「INCH ライブ」を開催します！ライブを BGM に、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方もぜひぜひお越しください♪

音楽しない方はのんびりしてても、もちろん OK ですよ～♪

毎年おなじみのバーテンダー「ひでやん」もバーを開きます！！



■日程 9月26日(土) 16:00 開演
～27日(日) 日帰りも OK

■会場：小菅村のいつものキャンプ場

■対象：子どものみの参加はできません。

■費用(食事代込み)：日帰り 1,500 円 宿泊 3,500 円

■BAR はカンパ制です。

■交通機関

※小菅村までの交通は自力になりますので、よろしくお願いします。バスの時間などをご相談ください。

■お申し込み：ライブの当日参加は OK です。楽器を持ってお越しください。



『冒険学校を考える』 その3

自然文化誌研究会の「冒険学校」を一緒に運営するスタッフのみなさまとの研修会を開催します！！
毎月 1 回のペースで拠点となる小菅村のいつものキャンプ場に集まります。

週末の 1 泊 2 日で、参加者のいないスタッフだけの状態で、実際にプログラムを試してみたり、スキルアップを図ったり、お酒を飲みながら「どんな冒険学校を目指すか?」「どんなプログラムを行いたいのか?」「どんな人間になりたいか?」・・・など議論をしたり、行動を共にすることで連携を強めたり・・・そんなことを考えています。

「研修会」という名前ですが、「集い」と思って気軽に参加していただける会にしたいと思います。

名称：「(仮) INCH 冒険学校スタッフ研修会」

対象：高校生以上で本会の冒険学校にスタッフとして協力してくれる方(高校生は参加者経験のある方)

内容：楽しむ、生活する、プログラム実施。遠方から講師が来てくれれば、より専門性の高い内容も。

参加費：高校生～大学生 1,000 円/1 回 社会人 2,000 円/1 回 食費・保険代込み、交通費は各自負担

<開催予定日> ※少人数の場合でも内容が濃くなるので開催する予定です。

1 回目：5/23-24 2 回目：6/20-21 3 回目：7/18-19

今現在、スタッフメーリングリスト(E-mail の昔からあるもの)と LINE のグループライン「INCH 社会人スタッフ(33)」の 2 つが連絡手段となっています。今後、整理しますが、今現在でこのような情報が届かないでいるスタッフで興味のある方は事務局あてにご連絡ください。

また、友人や知り合いで興味のある方にもぜひ声をかけてみてください！！

しばらく離れている社会人の方もこの機にぜひ遊びに来ていただきながら、また一緒に冒険学校を盛り立てただけだと嬉しいです！！

興味のある方はぜひご連絡をください！！

(事務局 黒澤)

「第 15 期ちえのわ農学校」報告

報告と新年度の募集内容です。

2019 年度代表 橋本和幸(東京学芸大学 3 年生)

皆様こんにちは！ 私は東京学芸大学サークルちえのわ、第 15 期（2019 年度）代表 橋本和幸です。私たち「ちえのわ」は、学芸大学構内にある教材植物園（農園）で地域の子もたちと食農文化体験活動をしています。また、INCH が開催しているキャンプにもスタッフとして参加させていただいたりもします。今回は、この場をお借りして私たちの活動「ちえのわ農学校」の紹介と、来年度 4 月から始まる「第 16 期ちえのわ農学校」の募集をさせていただきたいと思います！

【ちえのわ農学校とは】

「サークルちえのわ」は東京学芸大学のサークル。スタッフのほとんどが大学生で、教育・自然体験・農体験に興味を持って集まりました。「色々な体験、ちえのわ農学校でしか出来ない体験をしてほしい！」そんな想いを持って、4 月から翌年 1 月まで毎月 1 回（全 10 回）、「ちえのわ農学校」を地域の子もたちに向けて開催しています。そんなサークルちえのわは、3 つの“わ”を理念として活動を行っています。

*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。

*人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。

*知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。
ちえのわの活動の柱となっているのは、畑と田んぼでの活動です。

畑では一年を通じて夏野菜と冬野菜の栽培をします。毎年最初の活動で子どもたちは畑に種を植え、それから収穫まで毎月畑のお世話をします。今年（第 15 期）の活動では、夏はオクラやカボチャ、トウモロコシやスイカなどを育て、冬には大根や白菜、ほうれんそうなどを育てました。持って帰るのが大変なほど大きく育った野菜もありました！

田んぼでは米作りをしています。5 月に泥だらけになりながら田植えをして、毎月稲の成長を記録し、田んぼに触れています。10 月になると、稲は大きく立派に育ち、それを刈って、干して、その翌月には脱穀・精米、そして 12 月の活動ではみんなでおいにぎりを作って美味しく食べました！もち米も育てたので、1 月には餅つきもしました。

この二つの柱となる活動に加えて、毎月その季節に合った企画を用意して活動しています。今年は例えば、タケノコ掘りや染めもの、流しそうめんに焼き芋、竹工作・わら工作などなど！それぞれの季節ごとに企画を考え、みんなで楽しく過ごしました。8 月には農園で 1 泊だけですがキャンプもしました。

【第 15 期の活動を振り返って】

さて、ここまでちえのわ農学校について紹介させていただきました。ここからはせっかく頂いた場なので、私個人の視点から、感想などを含めて今年の活動の話をしていきます。

私は、15 期サークルちえのわの代表を務めました。私が代表として行った初めての活動である 4 月農学校の光景は、1 年近く経った今でも鮮明に覚えています。そして私だけでなく、子どもたちにとっても最初の農学校。しかも 15 期は初めて農学校に参加してくれた子も多く、大きな緊張や不安の中にいた子もいると思います。けれど、いざ農園に来て、自然やスタッフと触れあいながら楽しく活動していたのを見て、「15 期ちえのわ農学校もきっと良い

農学校になるだろう」と確信し、「良い農学校にしていこう」と誓いました。大げさかもしれませんが、本当です。でもそれは、きっと私だけじゃなく、スタッフみんなが思っていた筈です。実際、15 期農学校はとても楽しく、充実したものになったと思います！

さて、そんな 4 月農学校ではタケノコ掘りを行いました。全然見つからず苦戦していたり、見つけたタケノコを夢中になって掘っていたり、いろいろな姿が見れました！また、先ほども言ったとおり、4 月は種や苗を植える始まるの季節です。これから時間を共に過ごす畑で最初の活動も行いました！



それから、移り変わる季節を感じながら、様々な活動を行ってきました！

これは5月の田植えの様子。スタッフと子どもが一丸となって、田んぼにお米の苗を植えていきます。田植え初体験の子も多く、みんな泥だらけになりましたが、一生懸命植えていました。



いつも何気なく食べているお米ですが、苗から触れ、経験することは、子どもにとっても、そしてスタッフにとっても貴重な経験になっていてくれたら嬉しいなあと、思ったりしていました。

10月には、こんなに大きく稲穂が成長して、稲刈りを行うことができました！



雨が続いた後の稲刈りで、悪条件ではありましたが、みんなの頑張りで、無事刈ることができました。

そしてこちらは畑の様子。1年を通して畑のお世話をしていく中で、みんなの手つきが慣れてきて、畑に詳しくなっているのかなと頼もしく感じました。



保護者さんから、「持って帰った野菜をお家で美味しくいただきました」と報告されるたび、本当に嬉しく思っていました！ 持って帰れなさそうなほど大きく育ったのは、スタッフの予想を遥かに超えてましたが、それでも、みんなが真剣に畑に向き合ってくれて良かったです！

こちらは8月農学校で行ったヤマメさばき。一人一人が慣れないながらも頑張ってヤマメをさばき、そして命と向き合いました。



「お泊り企画」というのがメインの8月農学校ですが、イナゴを取って佃煮にしたりなど、「命」や「食」についても触れられたんじゃないかなあと考えてたりします。お泊りも、とても楽しく一晩を過ごせました。皆で泊まる経験は、「ちえのわ」を一層強い“わ”で結んでくれました。他にも8月はINCH主催のキャンプに農学校の子も参加してくれて、忙しくもとっても楽しい毎日でした。

毎月企画を考え、準備し、運営していくのは本当に大変でした。けれど振り返れば、自信を持って「楽しかった」と言えます。色んな季節を色んな子ども達・スタッフと過ごせたのは、幸せでした。これからも、楽しい農学校を続けていけたらと思っています！

そんなちえのわですが、興味を持っていただけたら是非、ちえのわのHPやブログを見てみて下さい。長くなってしまいましたがここまでお付き合いいただき、ありがとうございました！

東京学芸大学第15期サークルちえのわ
代表 橋本和幸

【第 16 期 ちえのわ農学校について（募集要項）】

□活動要旨

正式名称：ちえのわ農学校

対 象：小学校 3 年生～中学校 3 年生までの男女 18 名（抽選有）

スタッフ：東京学芸大学学生を中心に 30 名程度

場 所：東京学芸大学 環境教育研究センターおよび教材植物園(彩色園)

費 用：実費負担年額 15,000 円（食費、保険、材料費等）

主 催：東京学芸大学サークルちえのわ URL: <http://www.gakugei-chienowa.org/>

共 催：NPO 法人「自然文化誌研究会」 URL: <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

後 援：小金井市教育委員会

□2020 年度 年間予定

月 1 回の土曜日（全 10 回） 10:00～17:00（4～7 月）、10:00～16:00（9～1 月）

（日程・内容ともに変更する可能性があります。）

日程	4/18	5/16	6/13	7/11	8/22-23 (宿泊)	9/12	10/10	11/14	12/12	1/23
活動内容	開校式、農園散策夏野菜の種まき	田植え	かかし作り	竹工作	夏野菜料理 ヤマメさばき	冬野菜種まき	稲刈り	脱穀・粳すり 精米	もちつき、稲わら工作	修了式
夏野菜の栽培						冬野菜の栽培				
田植えから脱穀・粳摺り・精米までの稲作体験、野菜の栽培・調理、自然を対象にした企画など										

※活動内容で未定な部分もありますが、子どもたちのやりたいことを聞きながら決めていきたいと考えています。また自由時間や季節ごとの農園散策、おやつ作りなどを通して、子ども一人ひとりがふと感じた興味を大切に活動していきたいです。

○参加の申込方法

まずはお早めにメールをしてください！！

申し込みに必要な情報を書く（事前に必要事項をもらう）必要があります！！

①お問い合わせ→資料をお手元に

ちえのわ農学校のメールアドレス(gakugei_chienowa@yahoo.co.jp)にメールを送信してください。

参加希望の旨、お子様のお名前と学年、保護者住所・お名前を書いてください。

②資料を受け取る

ちえのわ側がメールを受け取ると 1 週間以内に返信があります。1 週間以内に届かなかった場合、ご連絡ください。

③お申込み

2019 年 3 月 29 日(日)必着で申込書を、郵送またはメールで必要事項を記入の上で送ってください。

宛先：〒184-8501

東京都小金井市貫井北町 4-1-1 東京学芸大学 サークル ちえのわ

Mail: gakugei_chienowa@yahoo.co.jp

問い合わせ先：070-2175-0558（奈良）

参加希望の方、まずはお問い合わせください～！3/29 は問い合わせではなく、申し込みの必着日になります！！

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑬

前回のナマステ138号（2019年12月10日発行）の「タイ環境学習ツアー2019」その①の続きである。若林卓司さんの文に私が適当に写真をのせたものである。

若林さんと出会って20数年がたつ。バンコクのラジャバトプラナコーン大学であった。いっしょにカオヤイ国立公園にいき、タイ人との通訳をしてくださった。年に一度一週間寝食をいっしょにいろいろ語り合う友人となった。ウタイタニー バンライのパンダキャンプのシリポンさんとも偶然以前からの知り合いであったことに驚いた。私たちの現地スタッフと失礼だが勝手に思っている。このキャンプのあり方や、ワークショップ等のテーマについても貴重な意見をいただき今日に至った。感謝である。

今年2020年のワークショップのテーマはどうかと中ゴミさんと話しているがまだ決まらない。今回は8月10日から13日世界自然遺産のフーワイカーケンでの1日目までを述べた。今回は14日、2日目以降を述べる。（中込 卓男）

「タイ環境学習ツアー2019」 その②

若林 卓司 日記から

8月14日

朝はいつものように管理事務所の近くのスー・ナカサティアンの像の方へ歩いて行った。像の前ではスーと同じような持ち物を持ち、同じような格好をして剛君が写真に写った。これでこそ悪をくじく立派な私設レンジャーである。



毎回1人しかないので、古株のゴミゴメもいまだ栄誉あるその地位についていない。宿泊所前の広場やここの広場でも2種類のシカが放されている。タイ語でヌアサーイというシカとラマンというシカである。このごろはトラやヒョウがこの辺りまで出てきて、狩りをやるようになり、結構おびえて、私たちの動きにも右往左往した。

この朝、よく見れた鳥はズグロコウライウグイスで若鳥一羽を含む家族で餌を漁っていた。



▲ズグロコウライウグイス

また、金属的な声のズアカミユビゲラをゴメさんとポンティップが追いかけてまわっていた。

また、剛くんが突然走り出して木の幹を見ているので、みんなで行くとピワハゴロモがいた。



宿泊所に戻り、食堂に出かけて、朝の食事を済ませた。シリポンさんは8食分の昼飯を作ってもらっていた。今日行くのはサップパーのレンジャー駐屯地を経て、ナーラム山である。今日もリンさんの案内だが、生き物を見つける素早さには舌を巻く。

例のように「ドーク・シャバー・ディン」と呼んでいる花が咲いているところで、車を降りる。地面から花だけが出ているので、以前の名前「地の花」、シャバーを取った方が気に入っているのだが、シリポンさんもリンさんも今回はそういうので、従うしかない。

この辺りにはキノコが多く、ゴミさんの出番だった。タマゴタケの見事なものもあった。



キノコを見れば私たちは食べられるかどうか聞きたがるが、リンさんの答えが洒落ていた。「1回だけ食べられます」みんな笑ってしまった。また、野生のホヤも咲いていた。ここからだらだら歩いてサップパーへ。シリボンさんは写真撮影がしたいといって、残ったので私たちは先に着いてしまった。待っても来ないので、リンさんに回りを案内してもらおう。

今朝、この駐屯地をゾウが通り抜けたそうで、その後を追った。木の幹に張り付いたような2メートル以上あると思えるヘビのミイラ化した死体。ノーイさんの話ではキングコブラだという。すぐにヌタ場や水場が現れた。シカや野生のウシ、ウアデーンの足跡があった。ゾウの足跡、トラの足跡もあった。またゾウが砂地を掘った水飲み場も現れた。ここはすごいところである。夜になればサップパーは昼間ののんびりした風景から、一転して生存の厳しい世界に変化するのだ。



シリボンさんが到着したようだが、バイパスをって行ったので、そちらの方へ歩き出す。途中、あちこちに点在するゾウの糞から、キノコが伸び上がっているのがおもしろかった。

道の交わったところに来て、シリボンさんの姿がないので、私たちはさらに先を歩いていく。いい加減歩き疲れたところに車が到着。ここから一気にナーンラムの頂上下まで上がった。

山頂までの階段を上って、展望台へ。先に登ったリンさんから、「サイチョウ」の声。慌てて行くとちょうど3羽のオオサイチョウが飛び去るところだった。

頂上にある四阿で昼を食べる。去年もそうだったが、この便所の壁にトッカーが卵を産み付けていて、メスと思える個体が卵を保護していた。



展望台からは広大なフーアイカーケーンが見下ろせた。実際はその一部でしかないが、はるか向こうの山を越えるとメーウォンやウンパーンへ行けると聞くと、私自身が足を踏み入れてみたい気がしたし、この辺りを通路にして活動していたタイ共産党やそれに賛同して行動を共にしたカレン族などの少数民族、さらには軍事政権に寄り圧迫を受け「森に入った」学生たちのグループのことなどが頭をよぎった。



シリボンさんがまた行方不明になったが、パンダキャンプのハリナシバチを今以上に増やすとなると、花や花粉が必要になる。何か適当な樹木がないか探していたのだという。

帰りはナーンラムの研究所へ行く峠のところまで歩いて下りることにしたが、車が止めてあるすぐ近くでキノコが見つかった。シリボンさん、ノーイさん、リンさんまでが何の躊躇もなく引き抜くのには驚いた。ここは国立公園よりも保護レベルの高い野生動物保護区である。なんと由々しき事かと思っただ、ヘット・コーンを前にしてはマツタケを前にする日本人と同じ心境なのだ。



私は10月ごろ、毎年、オートコーでヘット・コーンを買う。1キロ600バーツと高いが、新鮮なのはてんぷらにして食べる。乾燥した売れ残りは安く買って、炊き込みご飯にする。どちらもおいしい。タイ人もこのおいしさのとりこなのだ。

峠のところから車に乗ったが、ここの木に大きな鳥が止まっていた。葉の陰にいたので、頭部はよく見えなかったが、私は大型のフクロウだろうと思った。そのときリンさんがカンムリワシだといった。ポンティップの撮った写真を見れば、その通りカンムリワシだった。



行きも帰りも荷台に乗っているリンさんの合図で、何度も車を止めて、鳥の姿を追ったが、鳥は木陰に逃げた後になるので、確認することはできなかった。しかし、色と体形から最も可能性の高い鳥、カンムリカッコウをはっきり

同定できなかったのは返す返すも残念だった。

車が宿泊所に着くころ、道の真ん中で女の子がカメラをこちらの方に構えていた。それで、私たちも車を降りた。リンさんの指さす方に鳥がいた。少し距離があったが黒くて頭部防赤い、大型のキツツキ、キタタキのメスだった。私たちはこの鳥を追って少し移動したが、女の子は我がグループに遠慮して来なかった。いい写真が撮れたのだろうかとちょっと気になった。

ここでリンさんと別れたが、リンさんはここに勤めて20年になるという。奥さんもこの職員で、ナコンサワンの家に子供を預けているという。動植物の知識はどこで勉強したのかと聞くと、本を読んで独学したといていた。

宿泊所に帰って驚いた。裏側の網戸が開いているのだ。この網戸は上下に留め金があるが、下の部分が甘いのだ。部屋を出る前に、中に入れていたゴミ袋からごみが散乱している。口を開けておいたリュックからいろいろのものが引き出されている。スナック菓子は袋が引き裂かれて、中身がない。ひどいのは豆乳のパックを幾つか置いていたが、それをすべて飲んだようで、ベッドの上に敷いておいた、掛布団がびしょぬれになっている。さらに、カギのかからぬトイレに侵入して、洗面台に置いておいたものを物色した形跡がある。足跡が残っているのだ。ゴミさんの指摘で、玄関にサルに注意の掲示がしてあるのを見たが、いままでこんな侵入はなかったのだ。こんな被害を考えてみたこともなかった。

夕食を食べに川辺の食堂へ行き、インスタントのコーヒーを飲みながらくつろいでいると、テント場に沿った道を数珠つなぎに駆けてくるものがある。シカの群れだろうかと思ったが、イノシシだった。50頭ほどの大人子供の群れは、食堂で出る残り物やくずなどが目当てなのだ。



この大群を目の前にして、ゴミさんが昨日のあの一頭のイノシシはいったい何だったんだろうと呟いたが、心に染みた言葉だった。以前は薄暗くなった情景の中を川を渡るシカがいたし、向かいの林や草原にシカがよく出てきて、懐中電灯の光を集めて見たものだったが、この辺りは以前のように安全ではなくなったのだろうか、その姿を見ることが出来なかった。

今夜もビールを飲みながらの歓談は以前ほど盛り上がりなかった。みんな疲れているのだ。考えてみれば、このフーイカーケーンへ来るようになってから、15年近くになるのじゃないだろうか。みんな年を取ったのだ。疲れは年から来るようになってきたのだ。ジャコウネコの餌づけはこの夜もしたが、誰も写真を撮ろうなんて思っていなかっただろう。

8月15日

昨夜、シリボンさんから、早朝の出発を言われていた。朝ごはんもバンダキャンプに帰ってからだという。出発は6時半ごろになり、朝の探鳥はできなかった。ただ、ゴミさんは朝早く起きていたらしく、再びイノシシの大移動があったことを教えてくれた。

帰りも剛ちゃんとノーイさんが荷台になった。シリボンさんは話好きで、運転しているときもしょっちゅう話しかけてくる。それで今回はハリナシバチについて質問してみた。本当にこのハチに関してよく知っていると思った。この前、ファミリー・フォーレストの発想が多くの支持を得たことで、名誉博士の称号を得たが、このままいけばハリナシバチに関してもその辺の学者よりはるかに上をいくだろう。バーンライの町に着くまで、私はその講義を聞き続けた。

朝ごはんの前にシリボンさんがちょっと来てくれというので、付いていく。ハリナシバチの巣に問題が起こっているのだという。ハチは自分たちにとって解決できない事柄が起こると巣を捨てるという。一つ目はもう巣を捨てた後のようなのだ。中には何もいなかった。二つ目はたくさんのガの幼虫が侵入しているのだ。この木は二つ穴があって、2種のハチがそれぞれ巣を形成しているというが、一つは多くの幼虫が中に入っているのであきらめるよりほかにないといっていた。いままでに、ハチがいなくなったり、このように巣を捨てざるを得なくなったのは10を超えているといっていた。養蜂はただ待っていれば果報が転がり込むとは言えないものなのだ。

ちょっと遅い朝食の後、いよいよのところへ行くことになった。去年、シーナカリンドム湖の畔にあるカレンの集落へ行ったとき、シリボンさんからモー・トゥックの話は聞いていた。ウンパーンを中心にして、タイ共産党下で医療活動をしていた人だ。バンコクへ帰ってから、そのうち出かけなおそうと思っていたが、結局その機会がなかった。シリボンさんと今回の予定を話しているとき、今日の午前中が空いているのに気が付いた。カレンの集落へ雑穀等のインタビューに行きたいというゴミゴメの声も聴いていなかったのだ。独断でシリボンさんに連絡を取ってもらえるように頼んだ。

モー・トゥックの家はスパンブリー県にある。といっても、バーンライから車で1時間もかからなかった。人に聞き、家を探し当てる。モー・トゥックはカレンなので、カレンの血を半分引くノーイさんに尋ねてもらったが、留守である。近所の人は畑に行っているというのだ。裏の丘がリゾートになっているので、上に上がって、竹作りのバンガロー辺をぶらぶらしていると、それらしき人が探し当てた家に入ったので、私らもその家めがけて下りて行った。このとき、モー・トゥックは女の人だと分かった。ノーイさんが少しカレン語で話していたが、普通にタイ語が話せたので、すいぶん気が楽になった。すぐにインタビューを始めた。



今年57歳になるという。医者になるきっかけを聞いた。モーは今いる家が生まれたところで、当時この辺りに4軒の家があり、家の前の道を共産軍が行き来していたので、荷を運ぶ手伝いをしていたという。その時はまだ12歳（1974）で、森の中の拠点へも行くうち、自然な形で共産主義の活動に加わったということだ。そして、医療活動をしようと思い、中国へ行き、ある地方の拠点で技術を教わったという。

今回インタビューに使った時間は短かったので、いろいろ聞くことが出来なかった。それでも、初めて共産主義活動に参加した人と話が出来たので満足した。ここだったら、いつでも来れるし、さらに同志の名前を何人も聞いたので、いずれ紹介してもらえと思った。

ゴミゴメは今回のインタビューに黙ってついてきてくれたが、ずっと気になっていた。遅くなったがやっと断りの話をする事が出来た。

パンダキャンプに戻って、しばらくして、シリワット、チンタナー両先生ご夫妻がパンダキャンプを訪ねてこられた。今年は日本人一行にバンコクで会えなかったからと、車でロップリーから来られたのだ。一緒に昼ご飯を食べた。



両先生が帰られてから、日本人は恒例のタイマッサージに行った。いつものように長時間のマッサージはできなかったが、3人とも爽快な顔をして戻ってきた。今日は木曜日である。定期市のある日である。ポータンさ

んがパンダを高校に迎えがてら、市のあるところまで送ってくれた。例年より規模が小さくなっていたように思うが、それでも多くの人でにぎわっていた。

ゴミゴメの関心は相変わらず昆虫である。今回はコオロギやタガメやコガネムシでなく、セミの方に目が行っていた。その眼力に押されたようにポンティップが20パーツ分買った。私も一匹だけ食べて見たが、おいしいとは思わ

なかった。しかし、その後このセミを見る事がなかった。誰かが食べたに違いない。帰りはシリボンさんが迎えに来てくれた。

今夜のメインはスム・カーオ・レーンである。キーさんとイエンさんが用意してくれた食事も整った。パンダが帰って来、ポータンさんが職場のフィリピン人の先生3人を連れてきた。トゥー先生一家も来た。タヌさんも来た。

今回のスム・カーオ・レーンは新しいオリジナル曲を聞かせてくれたが、練習不足の曲もあったように思う。



▲スム・カーオ・レーン

私たちが歌う番になった。まず、フィリピンの先生が歌った。私たちはもう何年前タイで流行した「マイ・コーイ」という歌を歌った。ゴメさんの練習に裏打ちされた伴奏とみんなの流暢なタイ語は聞いている人を魅了し、パンダとトゥー先生のお子さんに私たちも歌いたいといわせたぐらいだ。



▲「マイ・コーイ」

剛くんはギターを抱えて「とんぼ」を独唱し、フィリピンの先生との距離がぐっと近くなった。



▲熱唱する剛くん

とりはゴメさんである。新しいレパートリー開拓に余念がないようで、ハーモニカ演奏の能力の高さをを見せてくれたが、今年も去年に引き続きのセントルイスブルースがよかった。そしてこの歌を聞かなければバーンライに来た意味がない「イエスマン」が登場した。



10時を回るとだんだん寂しくなり、11時には後片付けを任されているノイさん以外いなくなり、私たちとスム・カオ・レーンの4人組でしばらく話し合った。このとき、以前から知りたかった歌の題名を聞いた。サラウィン河を歌った歌なので、インターネットでサラウィンで歌を探したがなかったのだ。カラワーンの一入、去年亡くなったモンコン・ウトックの「ソップ・ムーイ」という歌だという。来年はこの歌である。私たちはプレゼントのシャツをもらった。



▲「ドゥアンベン」を歌う若林さん

8月16日

朝食は昨日の夜出たミジンコ浮き草の卵焼きが再度出たので、おいしくいただいた。

パンダがまた私たちにプレゼントをくれた。ゴミゴメにはシャツを、剛くん、ポンティップ、私には帽子である。そのどれにもパンダが絵を描いてくれているのだ。今朝の3時までかかったといっていた。今年、大学の建築のデザイン科を受けるそうだが、合格は間違いない。

シリボンさんがリパンダキャンプにある竹株の中で最も大きい竹株の前で記念写真を撮ろうという。もう少しすればウタイタニーで一番大きな竹株になると期待しているものだ。男連中が並んでパチリ。



最後にシリボンさん、キーさん、イエンさんに別れを言い、ポータンさん、パンダも一緒にバンに乗り組んで、一路ダンのいるカンペンセーンのカセサート大学を目指した。

大学ではダンが昆虫館に案内してくれた。それと、チョウ園にも案内してくれた。ただ、この園のチョウはまだ一

匹も羽化していないらしく、園の外で何匹か目にしたのは面白かった。

お腹が減って来ていたので、ダンに学食に案内してもらった。みんなそれぞれ食べたいものを注文し、ダンとはここで別れた。ダンは昆虫学を専攻していて、将来はお父さんを助けたいといっているが、専門的な道が歩ける青年である。今年も短期間だったが、名古屋大学の招待留学生として、日本へ行っている。



▲左からパンダ、ダン、若林さん

バンコクに入ってから、道が少し込んだようだが、寝ていてあまり気づかなかった。今年のウタイタニー詣もこれで終わった。なかなか味の濃い取り組みだった。

8月17日(この日はナカゴメ日記)

バンコクのプラナコーン・グランド・ビューホテルにもどってきた。ゴミ、ゴメ、剛の3人で日中を過ごすことになった。16:00にホテルでチナタッタさんと待ち合わせまでの時間である。

剛くんが寺に行きたいということでバンコクで有名なワット・サケットに行くことにした。バスとスカイトレイン、タクシーを使ってなんとかバンコクの中心部まで行った。



ワット・サケットは黄金の丘で名で知られる低い丘で、頂上には金色に輝く仏塔が立っている。暑い中約300段のらせん階段を上った。

歴史あるバンコク市街の展望が広がった。今のように高層ビルのないアユタヤ時代(1350~1767年)この塔からの展望を垣間見た。

16:00にチナタッタさんと合流して、ここ数年通っている豊田勇造の音楽ライブに出かけた。エカマイにあるサバイチャイ・オールデイズで、毎年この時期に行われる

ライブである。ここでもビールを飲みながらである。



豊田勇造は70歳。京都生まれで、ずっとメッセージソングを歌い続けている。1984年、日本ツアー中のタイのカラワンバンドと知り合い、翌年にはカラワンの招きで、友部正人と共に3週間タイでのライブツアーを行う。この頃からタイと日本を行ったり来たりするようになる。

タイにも住んでいたことがあり、タイ語でカラワンの「ドゥアンペン」(満月)を唄ったが、初めはひどい発音で笑われたと言っていた。私もバンライ、パンダキャンプの宴で唄うことがあるが難しい。まあ頑張っ、そのうち通じるようになる」と励まされた。



2014年9月、タイから10年ぶりにカラワンのスラチャイとモンコンを招き、東京・神奈川・山梨・京都・神戸の各地でコンサートを行う。この時私は神奈川のイーサン食堂のライブに行き初めてカラワンの2人に会った。「ドゥアンペン」(満月)を情感豊かに独特の節回しで唄うスラチャイの唄と民族楽器のピンを巧みに演奏するモンコンに感動したことを覚えている。

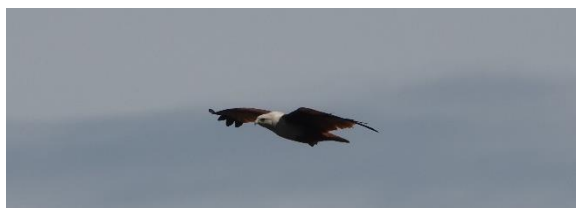
バンコクの夜はこの日も早く過ぎた。

8月18日

7時半にプラナコーンヘゴミ、ゴメ、ゴウの三人を迎えに行き、サムットプラカーンの自然資源環境保護・学習活動センター(ちょっと省略)の前面にある干潟へ行った。ちょうど引き潮だったので、ぼつぼつ戻って来ているシギ・チドリが見られた。



まだ夏羽なので、見やすかった。マングローブ林から干潟へ伸びている高度感のあるコンクリートの遊歩道を進んでいると、シロガシラトビが悠然と飛翔していたり、ナンヨウショウビンが大きな声を上げて飛び回っていた。私らは望遠鏡を持っていないので、確認できたシギ・チは多くない。アカアシシギ、オグロシギ、キョウジョシギ、チュウシャクシギ、サルハマシギ(写真に写っていた)、メダイチドリ、シロチドリ等。ポンティップの写した写真にはキョウジョシギの一羽の足にP33の標識番号がついていた。



▲シロガシラトビ



▲鳥を撮るポンティップさん

センターの北側にも遊歩道があるので、そちらにも行った。今日は人が多く、ポンティップの聞いた話では、マングローブの植樹に来ているということだった。



▲ナンヨウショウビン

11時過ぎに、揚げソムタムの店へ行った。ここで歓談しながら昼を食べ、1時間ほど過ごす。その後、私らが行った干潟の運河を挟んで南にあるパンタイノラシン禁猟区へ行った。以前見たことのある、保護されているカワウソを

見に行ったのだが、林野庁（最近名前が変わり野生動植物国立公園局という）の方へ移された後だった。



▲揚子ノムタムの店で昼食。おいしかった。

子供の時から飼われているカニクイザルが一匹いただけだった。

来る時見たコーカムの塩田には塩の山が見られなかったが、どこかないかと探してみた。するとあった。作業中だったが、許可を得て見せてもらう。みんなバチバチ写真を撮る。作業員の人のよさそうな一人が塩がいるかと私の手に山盛りに塩田の塩を盛ってくれた。みんなで食べてみるが、市販されている工場で作られた塩とはちょっと味味が違う。ゴメさんは袋に一杯詰めてもらっていた。



まだ少し時間があつたので、近くにあるパンタイノラシンを祀った神社へ行った。像の安置してある建物が鶺鴒のニワトリの焼き物で埋まっているのに驚いた。ナレスワン大王だったらわかるが、どうしてなのか、ポンティップがこの人に聞いていたが、お参りに来た最初の人かニワトリの焼き物を持って来たら、随時このようになったということで、本当はパンタイノラシンとは関係がないらしい。



私はパンタイノラシンのことはよく知らないが、ポンティップの話ではアユタヤ時代の軍の船のかじ取りで、誤って、ぶつけて船を沈めてしまったという。パンタイノラシンは王の船を沈めた責任を取って自害をしようとしたらしいが、いさめられたという。しかし、この責任感の強い男

が自殺を計れば、その霊は悪霊になると判断され、処刑されたという。

社内にはその場所があつて、今でも儀式などでかぶられる帽子状のものが置いてあつた。その下を時計回りに3周すれば、人生の成功者になるそうで、多くの人がぐるぐる回っていた。ポンティップの後をゴメさんも回った。おそらく、こんなことをやったのは日本人で初めてだろう。



ゴミ、ゴウはシアムシーというタイ風のおみくじ引きでしたが、日本風に言えば「小吉」が出たようなものだろう。

4時にプラナコーンに帰らなければならないので、隣接されている土日に開かれる市場で「アイテム・ポーラン」（昔のアイスクャンディー）を食べて、帰途に就く。道が少し入ったので、プラナコーンに着いたのは帰らなければならない4時の5分前だった。



今回も楽しい時を持てたので、本当に良かったと思う。剛くんはあまりしゃべらないが、いっぱいいいところを持っていると思う。また来年である。夜は「ソップムーイ」の他にもう一つ知りたいスプ・ナカサティアンの歌を探した。「สืบทอดเจตนา」というカラバオの歌だった。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.7 その 19

『冒険探検粉塵記

第 19 話 最期の未来を探しに辺境へ』

駄作者 文福洞先斗

ポンちゃんは民族植物学者なので、美しい花と女が好きだ。今時、こう言う率直な表現をするとすぐにセクシャル・ハラスメントと言われるだろう。美しい物事、事象、人々を愛でることは至極当たり前の心情で、何ら責められることではない。自然美を愛でるに臆することはない。世界史か美術の教科書でか、見知ったクレタ島のミノア文明の壁画片に描かれていた少女パリジェンヌの眼差しのように、大らかであってよいのだ。どんな花も女も化粧し、着飾って美しく装っているではないか。それはジェンダーgender を越えて人々に愛でてほしいからだろう。それなら、無意識下にほどほどのやさしい視線を注ぐくらいは了解されることではないのだろうか。これをもセクハラと責められたら、双方に美を愛でるという人生の楽しみがなくなると言うものだ。しかし、世間のニュースを見聞していると、どうして悪人は女や男で、よい人は女性や男性と表現するのか。性は sex ではなく本性 nature という意味で使用しているのか、これらの区別の理由がいまだにわからない。良い女や悪い男でもいいではないか。



写真 1. クレタ島のパリジェンヌ（Wikipedia より引用）と降矢さんの門男門女

ポンちゃんは齢を重ねたが、明るい服装にしたい。半分あの世に行ったような無彩色の服は着たくない。若者のリクルート・スーツが画一的で黒であることも見心地はよくない。女子高校生に冬でも短いスカートを強要していることも解せない。かわいいとは見えるが、健康に良くないのではないのか。制服など着ても着なくても、当人の選択に任せたらよい。皆さんのファッションが明るくならないと、世間も明るくならないから、お好きな、明るい色調の、着心地の良い服装をしてほしいものだ。

自然文化誌研究会にとっても、ぼくにとっても自然美についての師匠の一人は降矢静夫さん（現上野原市西原）だ。30 年近くのお付き合いで、彼から頂いた 300 通に及ぶ葉書をテキスト分析しようとエクセルに入力している。一瞥してすぐに仕舞い込んでしまった葉書の文面を読み返すと、四季を通じて自然への賛美が、俳句を添えて綴られている。熟読しなかったことが、いまさらながら残念で、申し訳ないとも思う。彼から頂いた門男は植物と人々の博物館のシンボルとして展示してある。民族植物学ノオトの表紙も、彼の制作した門男だ。ただし、彼のユーモアは門女も作ることだ。今、縫っている刺繍の課題は門男・門女と降矢夫妻の四季である。93 歳まで生業に勤しんだ最後の山村農人夫妻に、現代文明の最期の先に真文明の未来を見たいと考えている。

ヨーロッパの都市や田舎を巡って、美しい街も大聖堂も、村や農園も、神と人間が協働して創作した自然物の範囲にあるのではないのかと、ふと考えるようになった。大聖堂などは何百年にもわたって建造され続け、あるいは半分崩壊していても維持されているので、現代の風景にもよく馴染んでいるのである。西洋は自然 nature と人工 art を峻別し、東洋は自然と調和しているのだと、多くの日本人は学校教育で教えられるままに、そう信じているようだ。しかし、本当にそうであろうか。少なくとも今は違うと断言する。これほど自然から隔離された日本人の現代生活は高度経済成長期に前後する、ほんの50～60年ほど前に始まったことだ。今や、ヨーロッパのキリスト教徒よりも、日本教徒のほうが自然を忌避しているように変化してしまったかのように見える。

ぼくは自然を信仰するアニミスト、心は野蛮な原縄文人でありたい。文明人は教養（想い遣り）を失い、彼らこそ悪い心をもつ意味で似非野蛮人だ。人々は豊かな自然から恵みを受けいれて、楽しみ、感謝し、一方で、厳しい自然に抗い、透かし、祈り、信仰してきた。暮らしには苦しみばかりではなく、楽しみも沢山見つけられる。こうした慎ましく、謙虚でありながら、大らかな日々が縄文時代の山里暮らしにはあったのだろう。山里はかつて誰でも受け入れてきた。それはまれびと（折口信夫）であったのかもしれない。文明は自然から遠く離れてはならない。歴史を振り返れば、自然から離れるほどに、都市文明は崩壊に向かった。

原理とは自然に添い生業を営み、その土地から恵まれるもので生活することだ。原則とは原理に沿った自らの働きで地の食料を得て、暮らしを立てることだ。家族が楽しく幸せに暮らす身土不二は、原理である自然は身土、人間も自然に暮らす動物ということで、原則である文化は不二、原理・原則に縁ることだ。このように理解すれば、都市に浮遊する生活は原理や原則に縁らないので、都市民は自然に近い農山村で過ごす時間を意図してもつようにするのがよい。

ことかように理解したぼくは、日本人はいずれ近い機会に自然回帰するだろうと考えて、農山漁村の多面的機能における教育・文化機能および保健・休養機能を提唱したのである。この考え方は、食料・農業・農村基本法の条項にも取り入れられている。ところが、このくにの人々は自然に縁り添う信仰を失い、金権ばかりを拝むようになった。それが不幸の根源だ。今まさに、世界が際どい変曲点を迎えているので、個々人は根底にある大事な物事を探り、自律的に動かなくてはならないと思う。自由を奪われたり、悲惨な飢饉・飢餓の繰り返しはしない。美しかったくにが小汚く不幸なら、改めて、素のままの美しい暮らしに切り替えながら楽しく幸せに過ごそう。生業・基層文化を大切に継承し、学ぶなら、真文明への移行はできるかもしれない。そこで最期の未来を縄文時代後・晩期に探してみることにした。まだ国がなく、被支配の野蛮人たちが自然の中で自由に生業を営み、暮らしていた長い時間であったと思うのだ。狩猟・採集、初期農耕などの生業を営んでいたが、産業としての農業を強要されてはいなかった、すなわち、労働を強要する城市国ポリスはまだ発達してはいなかった。

生きるために、家族を守るために、野生動物・植物を狩猟・採集し、栽培化過程にあったいろいろな半栽培植物・保険作物を作ってきたのだ。半栽培段階にある植物は近縁野生種と雑種を作り、その野生種も収集されて穀物になっていた。本物の善き野蛮人たちの生活はとても複雑な原初の里山生態系をなしていたのである。水稻が作れなくて、稲の消費を節約するために、麦・雑穀、イモ・マメや野菜を混合して、調理してきたのではない。

多様な穀物＝雑草複合を継承する価値体系は、国権力の基盤である租税・石高、さらに商品、食糧戦略物資としての水稻とは異なる価値体系にある。縄文文化の山棲の系譜による伝統的知識体系の価値を、改めて認知すべきである。縄文時代中・後期から晩期にかけて、温暖な海進の時代の丘陵では狩猟・採集から小規模家族農耕を含めた複合的生業が行われ、当時としては世界的に見ても多くの人口を維持したようだ。海が後退し、平坦湿地が拡大すると、ここに水田稲作を導入して、その高い生産を求めて人々を移定住させていったのが弥生時代だろう。集落が拡大し、自己家畜化された人々に農業労働を強要して、生産・貯蔵できる水稻の栽培が国権力を成立させたようだ。その後も、平地の城市ポリスからすると、丘陵は順わぬ辺境であった。これら辺境は自由な山民の穏やかな暮らしとともに、服わぬ権力敗者

をも受け入れてきた。

世間では、CO₂などの温室効果ガス排出による気候変動を騒いでいるばかりで、現実的には課題解決をしようとはしていない。この処、元凶とされるCO₂などを減らすだけでよいのだろうかと思ってしまうようになった。気候変動はもっと大きな地史的变化に縁っているのではなかろうか。CO₂は植物の光合成になくてはならないもので、悪者ではない。問題は化石資源に大きく依存する生活様式にあるので、ここを変えない限り解決はしない。電気自動車に乗っても、電気を化石資源や放射性物質を用いて作っているのは、都市の汚染が見えるところで減るのみで、見えない所では悪くなるばかりだろう。現代都市文明の過剰な便利さと刹那的虚無こそが、深い心のなかの問題である。

人口増加で食糧戦略に翻弄される。激増する人口を糊する為に、現代の農業技術による食料の大量生産は必要だが、他方で、家族のために安全食材を得ようとするのなら、楽しくできる範囲で、ささやかでも自給農耕をするのが良い。都市への人口集中は病気の感染流行を促す。都市民のために家畜を狭い場所で多数飼育すると、家畜もパンデミックを起こす。家畜も野外で健康に過ごす方がよいのだ。

北極の氷が解けても海面はあまり上昇しないという理屈（アルキメデスの原理）はわかるが、気候変動によって、高山や南極・グリーンランドなどの陸地氷床が融ければ、いつかは縄文海進のように海面上昇を起こすだろう。この変化過程は複雑な海流や陸地の動きにも関連するようだ。とはいえ日本列島で海進が進めば平坦地が減少し、水田稲作の適地が少なくなる。一方で、温暖化や砂漠化が進行すれば、熱帯病害虫も北上するために、人々も家畜も縄文時代のように丘陵地に移住せざるを得ない。丘陵地では広くて平らな耕地は得られない。そこで、C₄植物である雑穀類の有効性が高まる。安全な食材、多種多品目は、手間暇かけても良い小規模家族自給農耕によってしか作れない。食料資源的に見て、魚食、肉食を漸減して、マメやイモ類を含む穀菜食を広める方向に行く必要が出てくる。このためには伝統的な知識・技術体系を、身をもって継承しておかなければならない。世間が無視していてもめげずに、今、受け継がなければついに断絶してしまう。

(2020.2.15)



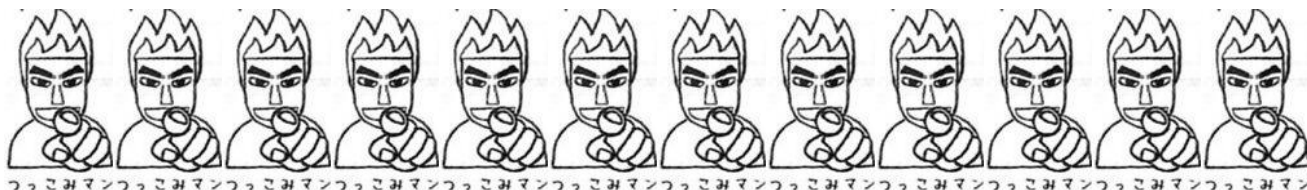
写真 2：降矢さんとシコクビエ



写真 3：小菅村の縄文土器片（守屋秋子さん所蔵、安孫子昭二さん撮影）、三内丸山遺跡の復元住居

『ツッコミマンの台湾を知ろう!』

文と写真：井上尚子



君は台湾という国を知ってるか? 沖縄より南に位置する台湾は、小さい島ながら多民族国家(たみんぞくこっか)で16もの少数民族がたくさん住んでいて山に行けばかわった山菜もたくさん食べられるんだ。



まだ中国語があまりわからなかったころ、ツッコミマンは山の中にある原住民のレストランに行ったんだ。山道を歩いていたらレストランの横の木のの上に小さな猿がいて、ひもで足が結ばれていたんだ。

そして横には看板があって「小心」と書かれていたんだ。

猿のなまえが「小心」というんだ! とおもい、なんて読むのか聞いてみると「シャオシン」だよ。と教えてもらった。なんて、かわいいんだ。

小さい心で「シャオシン」だなんて! 台湾人のネーミングセンス最高すぎる!!

そのことを友達に言うと、「はあ? 何言ってるの? 小心って危険って意味だよ? かわいい? なまえ?! この猿は危険だから近づかないでっていう意味だよ!」

と言われとっても驚いたんだ。

でも、なんで危険を「小心」なんて書くんだろう? 不思議でならない。

今はもう台湾に住んで4年になるけどいまだに「小心」をみると首をかしげる。



(上の写真の植物の穂先)



宮本茶園 ヘルミッシヨネルズ宮本

2017 年から受講していた県農業技術センター北相事務所主催の農業基礎セミナー、新規就農者を対象にした 3 年間の研修講座で農薬や肥料の使い方・獣害対策・農業簿記・経営診断等、農業経営の基本を学びました。初年度こそ皆勤でしたが 7 反の畑を耕すようになってから欠席続き、北相事務所から「2 月が最終講座なので出席しませんか」とお誘いをいただきました。閉講式の講話を聴きながら、「新規就農期間が終わり、これからは中堅農家として自立するのだ」という思いが込み上げてきました。同期の若者が何人も去った中、新規就農 3 年生が無事卒業式を迎えた感激を 62 才にして享受する事ができました。偶然ですが、帰宅すると郵便ポストに小学校 6 年担任の井上先生からの便りがありました。「書評を読んで求めた本で、農に生きる透君に何か参考にでもなればと思い贈ります」とあり、「日本列島回復論」という書籍が同封されています。50 年前悪童だった透君に今なお優しく接してくださる先生からの新規就農卒業お祝い、しっかり読んで勉強します。

・冬の茶仕事

昨年 6 月から佐野川茶は荒茶管理・製品加工を藤沢市の茶来末に委託、農協店舗で通年販売しています。藤野茶業部会議で木村普及員から「店舗に並べるだけの売り上げは高が知れています。販路開拓を努力しましょう」と指導があり、11 月 26 日相模原市主催商談会に藤野茶業部役員で参加しました。木村さんがプレゼン資料を作成しパネルのキャッチコピーは「気が付けば無農薬」、産地全体で農薬を使わない栽培に至った佐野川茶にピッタリの言葉です。久し振りにスーツを着て緊張した顔付きで製品説明させていただきました。



待望の新製品「一番棒ほうじ茶」が誕生しました。毎日新聞記者が藤野茶業部取材してくださり、12 月 5 日付神奈川版に「相模原ブランド茶販売」と紹介されました。記事に藤野茶業部の取り組みや茶来末社長佐々木さんとのエピソードが載って、問い合わせ先の農協藤野支店には立て続けに注文が入りました。私はお世話になっている方へのお歳暮用に購入しましたが、新聞掲載後 1 週間程で完売の人気製品となりました。お求めいただけなかった方、生産量増やしますので今しばらくお待ちください。



2 月 6 日、第 52 回神奈川県茶業振興大会が秦野市農業協同組合本所で開催されました。前号で茶園共進会審査を報告しましたが、審査結果は 3 等でした。昨年 2 等の小池前部長に続く上位入賞ができず残念な思いはありますが、整枝作業・有機資材の稲ワラ敷き等藤野茶業部全員の力添えがあったいただいた 3 等、素直に嬉しいです。昨年最下

位だった品評会出品荒茶は順位を上げて 108 位、全力で茶栽培に取り組んでいるつもりですが、銘茶足柄茶生産農家の中での客観的評価です。来年は二桁台に入れるよう更なる精進です。余談ですが、神奈川県で中等教育を受けた私はこの歳なっても結果・順位にこだわってしまいます。定期試験・模擬試験の点数・偏差値に一喜一憂しながら競争し挫折した青春時代のトラウマはなかなか消えません。

・相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会実行委員会

篠農便り 14 号で第 40 回相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会の報告をしました。昨年は毎回実行委員会に出席し、第 41 回追悼会開催に微力ながらかわかる事ができました。実行委員会では追悼会の意義を議論し、式典内容をていねいに企画・準備します。式典前日、実行委員総出で会場に地元自然素材を使ったモニュメントを造り、生花で飾ります。津久井では真実の歴史を真摯に学ぶ人々が日本のアジア侵略戦争加害行為を決して忘れず、軍需工場への電力供給を担うダム建設で犠牲になった中国軍捕虜や強制連行された朝鮮人の霊を慰めています。

実行委員会の忘年会、「これまで厚意で無償提供されていた飾花用生花が、来年は入手できない」という話題が出されました。私は上岩で「畑を地主に返すのだが、引き継いで耕作しませんか」という話をいただき、野生動物に食べられない切り花を育てようと考えていました。「来年新しい畑を借りて花卉栽培をするのですが、会場飾花用の草花を育てませんか」と提案すると、皆さん喜んで賛同してくださいました。



年が明け、新しい畑の準備を始めました。5 畝程の小さな畑ですが、枯れ草に覆われ猪・鹿の糞があちこちに見られます。刈り払い機で枯れ草を根元から切って熊手でかき集め燃やす作業を続け、農業技術センターに作付け草花を相談しました。春になったら実行委員にお願いし、動物防護柵修理や植え付

けを手伝ってもらい会場飾花の準備を始めます。日本政府は侵略し植民地支配した朝鮮で強制連行した徴用工・性奴隷にした日本軍軍隊慰安婦に謝罪・補償もせず居直り、差別・排外主義をあおっています。今の私にできるのは草花を育てながら「日本政府は朝鮮・中国の戦争被害者に謝罪・補償しろ！」と声を上げ、相模湖畔に眠る戦争犠牲者を弔う事です。

・ちーむゴエモンの活動（醤油搾りと古代米味噌仕込み）

千木良の田畑で米・麦・大豆を栽培してヤギ苑に集い里山生活を楽しむゴエモンの活動、今冬も醤油搾りが始まりました。12 月から 4 回参加しましたが、樽毎に微妙な味や香りの違いがあって微生物世界の奥深さをいつも感じます。2 月 10 日は千木良小学校 3 年生の見学がありました。子どもたちは総合学習で津久井在来大豆を勉強し、高橋さんの説明を熱心に聞いて作業を見つめています。津久井在来大豆は授業だけでなく学校給食のメニューにも登場し、子どもたちにとってなじみ深い地元農産物です。寒い日だったので熱い佐野川茶を子どもたちと先生に飲んでいただき「このお茶は津久井で作られているのですよ」と話しました。子どもたちや先生は誰一人津久井がお茶産地だという事を知りません。消滅しかけた津久井在来大豆は 2000 年頃地元篤農家が復活させ普及活動に取り組み、今では相模原市特産品です。まだ知名度の低い佐野川茶ですが、津久井在来大豆のように授業教材になる特産品に育てたいものです。



1 月の搾り作業で「古代米の玄米で味噌用麴を作りたい」という声が上がりました。雑穀街道普及会「醤油仕込みワークショップ」を企画しているので、玄米麴作りを引き受けました。米麦麴作りは昔仕事にしていたのですが、玄米麴は初めての挑戦です。白米より浸漬時間を長くして十分吸水させる事に

しました。

麴作りのコツは水を吸った米をしっかり水切りし、米粒が互いに付かない状態に蒸し上げます。半透明で粒を半分に割って白い芯が無くなり、指でつぶすとモチ状になった時が頃合いです。この状態になるのに白米は蒸気が通ってから 40～50 分ですが、玄米は 10 分程長く時間がかかりました。製麴器の麴蓋でなかなか麴菌が育たず出麴は白米と比べ遅く、設定温度を高めても同じでした。高橋さん・尾崎さんと協力して 14kg の玄米を 2 回に分けて麴にし、2 月 14 日に味噌を仕込みました。出来上がりが楽しみです。



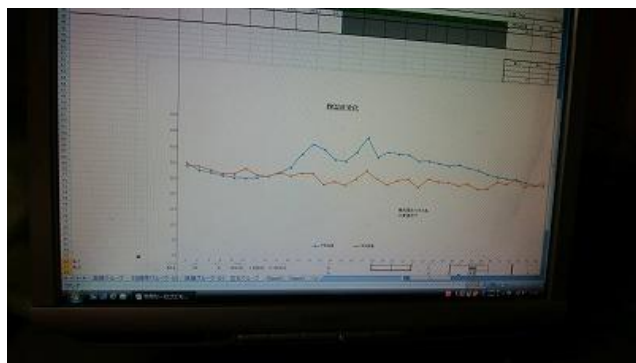
・雑穀街道普及会（醤油仕込みワークショップ）

昨年末、雑穀街道普及会「醤油仕込みワークショップ」開催の相談をしました。企画についてなかなか意見がまとまらず、ヤギ苑施設の借用手続きもあり 1 月 31 日～2 月 4 日「自称」雑穀街道普及会主催で実施することにしました。参加者は「桜を見る会」を真似して募集せず、私の大切なお友達に声を掛けて募りました。昨秋猪の襲撃を受けた大豆は収量 2kg、夏に収穫した小麦と一緒に原料に使いました。

私にとって 3 回目となる醤油仕込みですが、過去 2 回は単なる参加者でした。主催者になるには、材料・道具の準備からワークショップ終了までの段

取りを自分で考えなければなりません。高橋さんや尾崎さんを頼りながら企画立案、醤油麴作り・玄米麴作り・豆腐作りの 3 本立てプログラムで行うことにしました。

小麦の焙煎は尾崎さん、道具・種麴・仕込み水用意は高橋さんとゴエモン先輩頼りのダメ主催者ですが、参加者に満足していただけるようヤギ苑に泊まり込んで全力で取り組みました。高橋さんは醤油麴の品温記録を PC 入力し出麴までの温度変化グラフを出しましたが、食品加工教科書にあるようなグラフで感動しました。塩切麴に井戸水を注いで醪を作り、ワークショップを無事終了できました。



ヤギ苑宿泊中は、まあさの家の飯田さん・あみーゆの橋本さんが食事を作ってくださいました。最後の晩餐、橋本さんが「あんたは学校や会社では必要とされない人だったけれど、ゴエモンや追悼会では頼りにされて居場所があってよかったじゃない」と話してくれました。心暖かな人々に囲まれ、幸せな日々を送っています。

今年も上岩で雑穀栽培に取り組みます。興味ある方はヘル宮本までご連絡ください。

ヘル宮本：090-2205-8476

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.10 その3

会社より山小屋のほうが居心地がいいようで（展望荘ではたらく）

土居将人（府中市）

ナマステに寄稿しない？と依頼がきたのが今年夏。山小屋バイトはもの珍しいかなと2回にわたって載せてもらった。するとひと段落して、事務局から「仕事もいいけど、土居ちゃんについても書いて」とまたまた機会を頂いてしまった。ならば登山記録かな。分水嶺トレイルの一部を歩いた記事にしようと思う。3日間かけて60キロ弱歩いた。



[1日目]

塩山駅からバスに乗って1時間、終点の西沢渓谷に着く。空は高く、紅葉した葉もだいぶ落ち、カラッとした肌寒ささえ感じる。徳ちゃん新道を歩いて30分程、最初は体慣らしのためにゆっくり歩いたが、汗もかかずにスイスイ登れた。鹿を何度も見つけては、ピーと鳴いて逃げていく。4時間も歩けば甲武信小屋に着き、小休憩。少し進むと道がひらけ、これから進む稜線が目のあたりになった。枯れ木や低木が続いていて、ゲンナリするような上り下りも無い。奥多摩付近の山は森に覆われて蒸し暑い印象があったので、いい場所みつけた、と機嫌もよくなる。

3時を過ぎた頃、やっと雁坂峠(かりさかとうげ)に到着した。道標に「日本三大峠」と書いてあり、古来から道として使われていた。古くは大和武尊のころから往来があったようす。調べてみると、武田信玄が雁坂峠を整備したとか。当時の衣類や道具で歩くのは大変だろうなあと思う。



今日の目的地、雁坂小屋に着いたのは4時をまわった頃で、程なくして日が暮れた。テントは持ってきているが雨予報なので小屋泊まり出来ないか尋ねると、小屋のご主人は快く受け入れてくれた。聞けば登山道検査のために数名が泊まるためたまに小屋を開けていたらしい。ベッドの2段目に布団を何枚も敷いてもらったおかげで安眠できた。小屋で働くからこそありがたいと思えるようになった。こんなホスピタリティは自分には無い…。

[2日目]

本日の目的地、三条の湯でゆっくりしたいので、4時には歩き始める。検査に来た人達は当然寝ているので、できるだけ音を立てずに部屋を抜ける。のだけれど、ハシゴの最後の一段を踏み外してドンッと着地してしまった。うーん不格好…いつも早立ちする団体のゴソゴソに起こされる立場なので気を使ったのに…。



雁坂小屋からは水晶山、古礼山と緩やかに下っていく。ヘッドライトの灯りだけなので注意して歩く。雁峠(がんとうげ)を下るころには空が白み、歩く先

が現れてきた。朝日が登り、じわりじわりと視界が広がる瞬間が好きだ。陽が出るとグッと暖かくなり、清々しい気持ちになる。小屋の厨房で何度も日の出を迎えていても、いつも新鮮な気分になれる。

さて峠には雁峠山荘がポツンと建っているが、手入れされなくなって久しい。実はこの先にも奥多摩小屋という立地の良い小屋があったのだけれども、去年に老朽化などで閉鎖され幕営も禁止となった。山小屋で働く身としては小屋が手放されるのは寂しい限りだが、仕方がないのだろう。そして朽ちていくのは登山道も同じで、雁峠から将監峠、飛龍山と繋がる道は一ヶ月経った台風 19 号の爪痕が残ったまま。復旧はまだ手付かずで、安全に通行できないと案内する小屋もあった。結局、登山客が何倍に増えようと、すぐにインフラが整う訳ではないんだと感じた。

三条の湯には 2 時頃に着いた。無人小屋のこととか、風景などなど考えていたらいつのまにか着いていた。テント泊とお風呂、あとコーラお願い、と受付して、20m 程下ってテントを張る。



お風呂は 1 時間ごとに男女の入浴時間が入れ替わるそうだ。2 日間とはいえ歩き通しだったので、顔を擦ると潮が手につく。いよいよ入浴！と服を脱いだとき、小屋泊まりの 2 人がやってきた。浴室の扉を開けると 4 人入れば手狭な内湯がひとつ、カランがひとつの小さなお風呂。蓋を協力してはずしてとっぴりと浸かると、ヌルとした感触と硫黄臭がして、本当に温泉なんだと驚いた(そもそも天望荘には水源がないので比較できない)。なるほど、友人がお勧めするわけだ、と納得する。一緒に浸かる 2 人組は、学生の頃からの付き合いで、会社を退職して時間ができたから登りに来たという。「持つべきものは友だね」と話すが、本当にその通りだと感じる。小屋に来る団体のうちにはツアー以外に、

時々昔馴染みの集まりも見かける。そんな彼らは荷物を持ち寄ったり、ペースを合わせて飄々と登って来ることが多く安心できる。風呂で一緒になった彼らは 60 歳を超えるそうだが、70 超えても歩いていたいと楽しそうに話していた。

[3 日目]

昨晩はやる事なくさっさと寝てしまった。行程も長いので夜明け前にテントを畳むと、小屋では朝食の準備で忙しそうだった。受付で挨拶だけして雲取山へ向かう。



3 日間のうち、今日の行程、三条の湯から奥多摩駅までの約 25 キロが最も長い区間となる。もっとも、通行人も多くメジャーなコースなので気楽に歩けるし、久しぶりの雲取山からの稜線歩きを楽しみにしていた。雲ひとつない快晴のなか、稜線を上下するか、平坦な巻道を通るかもその時の気分で決める。ハイペースに合わせたり、人を待つ必要もなくぐんぐん進み、これは快感と言っている。登山というよりハイキング…ロングハイクのペースに近いのかもしれない。



ちなみに、ロングハイクを知ったのは最近のことで、長い距離を歩き、その土地の文化や人に触れる旅のことを指す。日本でも四国八十八ヶ所がそれに

あたるが、馴染みがなくむしろトレイルランニングが注目されている。ランニングブームも相まって、長距離を短時間で走るトレランが「お手軽」なのかもしれないが、競技性あって、山の保全や危機管理のモラル等難しい面もあるので否定派も多い(私も最近始めた。トレーニングが結果に結びつく達成感があって面白い。これからの山登りは、古典的な山頂ありきの縦走スタイルか、旅のロングトレイルか、競技のトレランか…おんぶに抱っここのツアー登山も依然多いか。と様々な選択肢が派生していて面白い。



民家を抜けると奥多摩駅に着いた。駅うえのカフェスペースは明るい色づかいがオシャレで、地元のお土産も揃っていた。15年前は、なぜか酢イカなんか売られてて古臭かったなあ、なんて懐かしと思う。そういえば小学生の頃、キャンプの帰りは遊び足りないような、疲れて帰りたいような気分で電車を待っていた。今は充実感があり、少しは前向きになったのかもしれない。

【登山の計画、これからの計画】

山に登る一週間前のこと。ハケ岳縦走をやってから、また長く歩きたいという気持ちが強まっていた私は、次は甲武信ヶ岳と考えていた。というのも、甲武信ヶ岳に至るまで一泊する必要があり、学生的时候は敬遠していたから。周りには両神山、雲取山や大菩薩嶺と馴染み深い山に囲われていても、今まで甲武信ヶ岳に登る機会が無く、ぽっかり穴が空いていた。金峰山から甲武信ヶ岳への縦走ルートも Teppan だが、何度も歩いた雲取山まで繋がる道も面白そうだし、どうせなら奥多摩駅まで歩いてしまおう、と目的地ありきで登山道を結んだら、丁度いい行程になりそうだった。悩んだのは三条の湯へ到着する時間で、知り合いがお勧めしていたので絶対に

早着して入浴したかった。しかし雁坂小屋からは遠く、笠取小屋に泊まるなら前日にもう一泊しなければならぬ。結局、セオリーから少し外れて雁坂小屋を夜明け前に出発することにした。

距離や時間ありきの計画というより、やりたいことを取り入れて、どうすれば出来るか帳尻を合わせた予定になってしまった。タイトな時間設定になったし、夜に雨予報ならテントを諦めて小屋泊まりでもいいかと場当たりな部分も多い。ああ、学生のころには出来なかった穴埋めをしてるんだなあ、と思う。とはいえ後ろ向きではいけないので、山との関わり方を色々試していきたい。夏は沢登りや釣り、冬はキャンプにバックカントリースキーなどなどとても気軽なものではないけれど。器用貧乏になりませんように。



(おわり)



アイラ島再び（その1）

佐伯 順弘（岐阜県）

2016年4月。その頃、若干気持ちが落ちていた。定期異動が鉛のように重い悲しみを連れてきていた。所詮将棋の駒にすぎないのだから、不本意な転属は当然のことである。捨て駒という言葉があるが、それは状況を打破するための作戦であり、最終的な勝利を得るためならば何の文句も言うまい。エースを勝たせるためならば、喜んでサクリファイスとなろう。それが自分の勝利だと思えるからだ。しかし、そうでない状況、つまり切ること自体が目的の場合は何ともやりきれない。自由契約にしたいのだが、特に不祥事を仕出かしていない公務員を解雇するのは難しい。

給特法の問題点について指摘したり、部活動と称する時間外労働を強制することについて問題提起をしたりしただけなのだが、どうもそれが気に入らなかったらしい。試験を受けてまで、ここにいたいと願い、研修を受けてまで、ここに残りたいと願っているのだから、どのような仕打ちを受けても我慢しろということか。自分の置かれている異常な状況についての疑問、質問は一切認めない。意見するなどもってのほかということか。「部活動は業務である以上やるのが当たり前。」という職員も少なくないが、業務ならばなぜ適正な残業手当は支払われないのか、なぜ日常的に勤務時間を越えて業務に従事しなければならないのかについて考える者はいない。

（2019年末には給特法が改正されたが文科相も認めているようにこれ自体には教員の奴隷労働を改善する効果はない。根本的な解決策は明らかなのだが、これまで奴隷として使っていた資源を手放す教育行政及び保護者などいない。）

そして、面倒くさい奴はどこか行けと・・・。

いや、このクソな日常にも喜びを見だし、希望を見だし現実に目を背けて生きていくのが虐げられた者の生き方だ。

だから、現実逃避することにした。現状に目を向けないことは何と楽なことか。人間どんなに苦しい状況に置かれてもそれを認識できなければ幸せな

のだ。わざわざ目を開かせてもらうには及ばない。死ぬまでごみ溜めで這いずり回っていても、真実に目を向けなければ楽園なのだ。そして、息ができなくなる前に息ができる場所に退避し、病んだ精神を癒すことにした。

重い話題から入ったが、そんなわけで、ああ、旅に出たいなあと思った時には、既に旅行の計画が瞬時に立案されていた。瞬時にと言っても0.125秒くらいはかかったかもしれない。

「そうだ、アイラ島行こう。」しかし、既に相当な深刻さで精神を蝕まれていたため、勢い余って、夏休み海外旅行2本立て、ダブルハッターを立案してしまった。アイラ島のあるスコットランドと高雄がある癒しの島台湾である。

6月13日にはロンドンまでの航空券を確保し、ロンドンからグラスゴー、グラスゴーからアイラへのLCCを次々と確保していった。そして、グラスゴーとアイラ島ボウモアの宿も確定してしまった。学生の頃の旅はホテルの予約などせず、臨機応変に宿を確保していた。ダメなら野宿も辞さずという構えていたが、最近は時間と自由を売って生業としていたため（極めて私的な旅行でさえ、旅行計画書を提出し承認を受ける必要がある。）、旅に使える時間が短く、仕方なくホテルを予約しているのだ。

希望は絶望的な状況を楽しませるエネルギーである。敵地に潜入した工作員のごとく、本心を悟られず、笑顔で業務をこなし、精神が崩壊しないように時々息継ぎ（冒険学校とかソロキャンプとか）をしながら、その時を待つ。

◆2016夏旅 I 台湾・高雄へ

23JUL2016—25JUL2016 2泊3日

あまりにも短い時間だったが、十分癒された。



0645 起床。アラームより先に目覚める。眠りは浅かった。ま、そういうものだ。排便身支度等々。
0710 チェックアウト 1353HKD⇔18084JPY

そして、驚愕の事実を知る。フロントから空港まで極めてなめらかで段差のない通路があったのだ。空港ホールまで所要時間3分。



0735 出国審査。やはりスタンプも何もなし。通過所要時間約 10 分。出国はこんなもんか。

0750 朝食。サンドイッチ+水 82HKD

0850 搭乗。着席。CX257 0910Dep.

0930 いつの間にか離陸。最近離陸の時になぜか眠くなる。離陸の時の加速度が $F=ma$ を実感できて楽しいのに……。残念である。

1022 朝食。1536 昼食。後は映画を観て過ごす。こんな時でも英語の勉強である。決して娯楽ではない。日頃の鍛錬こそ成功への王道である。

エクストラクション、007 スペクター、トランスフォーマー・リフューズドなど、

2120 もうすぐ到着とのアナウンス。時計をロンドン時刻に合わせる。7時間戻して 1420。

(以後ロンドン時間)



1442 タッチダウン。1530 イミグレ通過

1540 ここでも両替してみるが、完全に失敗。

50000JPY⇔309.18GBP!!30GBP も少ない。

両替情報：台湾は台湾の空港の方がレートが良いようだが、イングランドは日本の空港の方がよいら

しい。いつもぼんやりしているので、すぐ忘れてしまう。今回は深く記憶に刻んでおく。



1606 心はロンドンっ子なので、当然交通カード「Oyster」を持っている。さっと改札を通過し、キングスクロス駅へ向かう。空港から都心まで約1時間。もうサブウェイも慣れたもんさ。



1711 キングスクロス着。1722 ロンドンの定宿 Generator hostel にチェックイン。ぼんやりする間もなく、明日の鉄道情報を探索しに出かける。乗り場、時刻表、そして切符も買う。LGW（ロンドンガトウィック空港）行きのチケットは 10.33GBP。1840BK。どこの国でも安定のうまさ。体に悪かろうが、心の平穏が大切だ。2000 宿に戻り、明日の動きをシミュレーションする。地図や通過経路、入口、各ポイントの通過時間など秒単位でイメージする。(っつのは言い過ぎ。そんなことするわけない。)

それでも、いつ出動の指令が発令されても対応できるように荷物は常にまとめておく。緊急出動などあり得なくても、そういう心構えで生きていきたいのである。それが敵地に潜入した作員の習性である。と、カんだところでバスルームへ。その壁に貼ってあったのは……。



小さくて見えないかもしれないが、なかなか笑える。こういうセンスって素敵っ！

2200 どうせ深夜にクラブ帰りの若者がガシャガシャ帰ってくるに決まっているので、素早く寝てしまおう。少しでも脳を休めておかねば。

DAY3 (10AUG2016) ロンドン→アイラ島

0520 起床。来た時よりも美しく片付ける。しかも極力音を立てずに。窓から漏れる僅かな灯りを頼りに行う。この程度の隠密行動は基本である。同室の人々の迷惑になるので、最後に忘れ物点検の時だけヘッドライトをつけ、すぐ消す。

洗顔、歯磨き、排便を素早く済ませ、パッキングを確認。チェックアウトはカードキーを返すだけ。0552 起床から 30 分で Hostel 出発。



0600 セントパンクラス駅に到着（既にこのあたりの地理には詳しくなっていると思うが、キングスクロス駅の隣である。）掲示板に乗り場が明確に示されていて安心する。



プラットフォーム A である。

0620 定刻出発。0715 約 1 時間で LGW-AP 到着。到着した南ターミナルから北ターミナルまで無料の交通機関で運ばれる。



（列車の姿は全く見えず、エレベーターの扉みたいなのが開くとそこに乗り込む。しばらくして扉が開くともう到着。横に動くエレベーターのようなもの。列車に乗っている気がしない。）

0730 とりあえず時間に余裕があるので、朝食。サラダにカプチーノ。これがまたうまい。



しかし、まだアイラ島には到着しない。（続く）

八丈島探検記～概要編

賛田隼人（だにえる）

お久しぶりです。だにえるです。以前、タイの環境学習キャンプに行った報告をして以来のナマステです。

1. 僕は気楽に行くことにした

僕が八丈島に行ったのは、今回が初めてではありません。僕が大学四年生（2015年）の時に、「大学を卒業する前に、学生のうちでないとできないことがしたい。」と友人A,Bに相談し、八丈島とさらに南の青ヶ島に2週間ほどキャンプ生活をしてきました。その時は友人AはYB-1（原付です）、友人Bは徒歩、僕はクロスバイクとチグハグな組み合わせで島を巡って楽しんできました。ただ、八丈島も青ヶ島も伊豆諸島に属する火山島で、大変坂が多く、自転車ではとてもつらい移動でした。社会人になり、リトルカブ（これも原付です。）を手に入れた僕は、「今なら快適に八丈島を移動できて、楽しめるかな。」と思い、八丈島キャンプを決めました。このお気楽な考えが後々どうなるのでしょうか。

2. 思えばあっという間だった

まずは簡単に日程や諸経費を先に書こうと思います。これを見て、「簡単そうだな、行ってみようかな。」と思う人がいるといいなあ・・・。

8月18日 竹芝桟橋より22時30分出航、船で一泊。

8月19日 八丈島底土港へ8時50分到着、テント設営を済ませて八丈島1日目

8月20日、21日 八丈島をうろうろ

8月22日 早朝にテント撤収、9時40分出航。約11時間かけて竹芝桟橋へ。

ということで、実質的な滞在は3日間でした。

金銭的には、船の往復で18,280円、原付の輸送費が往復で8,000円、現地での食費が10,000円程。ガソリン代などの記録が残っていないものを合わせても4万円前後で済んでいるかと思います。宿泊費を計上していない？・・・八丈島はキャンプ場の利用が無料です。綺麗な水洗トイレも、シャワーもゴミ捨て場も完備しているのに、無料です。島

に行くまではそれなりにかかりますが、滞在中はすっごく安く済むんです。八丈島、素敵なおとこですよ。皆さんも行ってみませんか？

3. これは旅費には含まれません

4万円程度で旅行にいけるのは事実ですが、キャンプをする以上、道具が必要になります。そのあたりについて書いていきます。買ってよかった！というものだけ詳しく紹介します。

・テント NatureHike という中国メーカーの3人用テントを持っていきました。原付で運べるので滞在時の快適さを優先して3人用ですが、寝床と荷物を置いても余裕があったので2人用のもので十分だったなと思います。値段が手ごろで、2万円でお釣りがきます。グラウンドシートが付属しているとこや吊り下げ式の本体で設営も簡単な方だと思います。テントのインナーが蚊帳のようなメッシュになっているので暑くても大丈夫かと思っていましたが、八丈島の夜はしんどかったです。付属のペグがちょっと使いにくかった位しか不満がないので良い買い物でした。



・バーナー SOTO(新富士バーナー)のST-310というカセットボンベを使うタイプのものでお湯を沸かしたり、ご飯を炊いたりしました。有名なものなので持ってるよ、という人もいるのではないのでしょうか。5000 円程度で買えますし、手軽で便利です。八丈島は大きなスーパーがあるのでカセットボンベが現地で手に入るという点でも楽でした。本体(特に脚)が熱くなるので使い終わって片づけるときだけ注意が必要です。地震などが起きた時に、都市ガスだとすぐに使えない、なんて話も聞いたことがあるので災害時の備えとして持っていていいのではないのでしょうか。



・パニアバック バイクの荷台に付けるバックのことです。大部分の荷物はバックパックに詰めて背負っていましたが、八丈島についてツーリングするときに必要なものはパニアバックに入れて走っていたのでとても快適でした。以前、クロスバイクで八丈島に来たときはバックパックのみで非常に辛かった(背中やお尻が痛くなる)ので、その経験を踏まえて、という感じですね。

その他に、マットや寝袋、コッヘル、食料、着替え、暇つぶしの本などを持っていきました。道具類だけで 3 万円以上使っていますが、これは旅費には含まれません。

次からは旅の詳細を書いていきたいと思います。

ちょこっとコラム～日々楽しく暮らしているはるこの日常～その2

- 1 月 1 0 日 まったり過ごす。道の駅こすげで販売する藁で編んだトウガラシを作ったり、果物を薪ストーブで炭にしてあそんでる。
- 1 月 1 2 日 お子、寝返りを完全マスターしごろんごろんしている。朝、民宿のあっこばあが首が痛いので黒が大月市立病院まで連れて行った。午後会ったらちょー元気だった。
- 1 月 1 3 日 中組地区お松焼き。いろんな人がいて楽しかった。
- 1 月 2 5 日 ふきのとうが出始めたので売る。3パック売れた。シーズン到来。翔君とことみちゃん、翔君のご両親が来た。今日は古民家ホテルに泊まるそう。バブリシャス!
- 1 月 2 7 日 10:00にMazdaへ車を預けに行く。久しぶりの青梅、買い物 day。黒ママから海の幸がたくさん届く(@三陸)。いつもありがとうございます…!!
- 1 月 2 9 日 昨日の雪はすぐ溶けてしまいそう。とても暖かい日。3人で土肥さんのお墓へドライブ。道の駅で半額のほうれん草とニンジンを買う。
- 2 月 2 日 日曜日はどこにも混んでいるので家にいるのがイチバン! 新型コロナウイルスなるものが中国で発生、日本人も感染してんだって。田舎に住んでてよかった。
- 2 月 3 日 鬼のパンツはいいパンツ~強いぞ~強いぞ~履こう履こう鬼のパンツ!
- 2 月 4 日 離乳食進まねー! ゆっくりでいっか。夕食のホイコーローがめっちゃ美味しくできた。

目を瞑って開いた日記から。本物のわたしの日常。今日も元気だぞー。(はるこ)

○2020年の活動予定のお知らせ

- 2/15 NPO 法人自然文化誌研究会 『第16回通常総会』 @藤野町
4/19 『のびと講座 野草の天ぷらとお茶つみの会』 @東京学芸大学環境教育研究センター
5/2-5 『冒険学校 むらまつりキャンプ』 @小菅村 3泊4日
8/2-8 『こすげ冒険学校』 @小菅村 6泊7日
9/26-27 『INCHまつり』 @小菅村 日帰り or 1泊
12/26-28 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日

※ 毎夏に開催してきた『やまめ・いわなキャンプ』は今年度の開催はありません。

※ 『(仮) 冒険学校スタッフ研修会』を毎月開催していく予定です。

※ ログハウスづくりは、メンテナンスを中心に続けていますよ〜♪

○ 事務局より

東京学芸大学の(公認サークル)「冒険探検部」は毎年すべき申請の手続きにミスがあり、廃部となってしまいました。しかし、当該の現役学生が継続する意思があるとのことで、再び申請を行い「冒険探検部」を継続することになりました(新規申請)。12月をもって大学内に部室が無くなってしまいましたが、「冒険探検部」は継続しています。しかしながら、部員は本当に少なく2人程度しかいません。誰か「冒険探検部」の部室の門を叩いてくれないだろうか・・・いや部室がない。これを読んだ学芸大学生で興味のある人は本会事務局までご連絡ください。

部室にあった装備や書籍、資料については小菅村の植物と人々の博物館で保管しています。くろさわ

○ 事務局の麗しき日々

- ・翔くんの新婚旅行はニュージーランドのもよう(行けるのかな・・・)。
- ・だにえるが引っ越した。一人暮らしか二人暮らしか・・・！？
- ・香歩ちゃんが車の免許をちゃんとマニュアルで取得したもよう。
- ・熊木日向くんは4月からKOボーイになるもよう(しかもSFC)
- ・現高3年生の晴華ちゃん、龍二、大地は進路が決まったのかな？
- ・千翔ちゃんは九州地方へ進学、さくらは理容師になったもよう。
- ・雫さんは今年で知命になるもよう(中老とも呼ぶ)。
- ・小菅村はGWが明けると村長選挙が行われるもよう。

○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下8つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1~12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円

学生会員：3,000円 賛助会員(個人・団体)：10,000円

家族会員：6,000円 特別維持会員：100,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雑穀街道特別会員(小菅特別から変更)：1口1,000円から

成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 139号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2020年3月10日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行> 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL：0428-87-0165・090-3334-5328(事務局黒澤)

E-mail：npo-inch@wine.plala.or.jp

H P： <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>